

随 想



カット／野田欽吾

●シアトル桜祭り観劇公演を終えて

思いをひとつに

吉武 順子

△神戸女声合唱団▽



この一年間、私達にとってシアトルと言う地名は特別の響きをもっていた。そのシアトルへ今飛び立とうとしている。この期に及んで、また留守中の家が気にかかる。今さら心配するのはよそう。母親がいなくても、なる様になるさ!! 日本のお母さんコーラスの自称代表として、頑張ってくるぞ、と自分ハッパをかける。

今回の神戸女声合唱団訪米公演は、作曲家服部公一先生が、ワシントン大学の客員教授をされてお

り、その推薦でシアトルの桜祭り委員会より招待を受けた。昼食など、いつも後まわしの練習は、主婦にとって厳しいものだったが、小橋先生の情熱と気魄に励まされて来た。シアトルは在留邦人や二世三世の多い街で、英語も分かり易かった。とは言うものの、あちこちで珍妙な英語が飛び出すやら、愛想笑いで誤魔化すやら。シアトルの人々は、非常に人なつこく私達は心のこもった歓迎を受けた。総領事公邸でのレセプションで歌っている様子は、その夜のTVニュースで放映された。さて、第一回目の公演。場所は三千人収容の本格的なオペラも上演されるオペラハウス。割り当ての練習時間は少ない。集合間際に、ホテルのエレベーターが故障!!皆必死で九階、十一階へと非常階段を駆け登る。公演の内容は、四部編成で

二十曲。小橋先生の御身体の調子が少し悪く、それをおしての指揮に、私達は一層心を合わせて、先生の気持に応えようとタクトを見つめた。

会場は、やはり在留邦人、二世三世の方々が多く、三部の日本のわらべ唄が一番喜ばれた。錢太鼓を持ち、お手玉をしながらの歌に、祖国をなつかしむ気持が私達にも伝わって来る。時間に追われ、二部に身につけるケープを、一部の時から密かにパンティストッキングに忍ばせたり、胸にゆとりのある人は、そこへ納めたり苦心惨憺。舞台裏で、ゴソゴソとあらぬ所からケープを取り出す滑稽な様子も笑う所ではない。決して自信満々で臨んだ舞台ではなかった。しかし、歌う者すべてが思いをひとつにして心をこめた時、それはすばらしい響きとなる。タクトを振る先生の顔が一瞬輝く。録音しながら聞いて下さる姿もあった。一斉に星条旗を掲げ、歌いながら退場



シアトルのオペラハウスの前で

する時、会場の人々の日本への親愛の気持、祖国への熱い思いが拍手に乗って私達に迫った。良かった、来て良かった、私達の目的は達せられたと、舞台の袖で尚も歌い続けながら、皆、目と目で頷き合った。「日本は良いです」と言った途端、涙ぐんでしまった人達。あの人々にとつての日本は、ソードパークで見た、太陽と大地の榮養をたっぷり吸い込んだ見事な八重桜のように、豊かで憧れに満ちたものに違いない。

唯、アメリカの舞台で歌ったと言う経験だけではなく、それぞれがいろいろな思いを抱いて帰国した。十日間、主婦である事も、母である事も忘れて、まるで修学旅行の女学生そのものだった。

★帰朝記念リサイタル

6月13日(土) 神戸文化ホール PM2:4

むな
虚しきかな

野田 欽吾

△洋画家△

グッド・モーニング、グッド・アフタヌーン、笑みをたたえて軽く挨拶を交わす。ホテルの廊下で、エレベーターの中で、お互い見知らぬ者同士が、異国の地で言葉を交わし合う。

人間疎外について論議が盛んでいろいろ取沙汰されている日本か

ら旅してみても、改めて国民性というものを身をもって知らされた。お互い日本人同士でありながら、空港からのバスの中、ホテルのロビー、廊下、食堂、ありとあらゆる場で接しながら気軽に挨拶が交わされない。異国で同じ国民と逢うことができた気強さ、安堵感がお互いを余計身近かなものに感じさせる筈のものが……。

カメラを胸に、大きな荷物を両手にぶらさげたツアーが、どつとホテルのロビーに押し寄せた。例によって胸にバッヂをつけ、ロビーでワイワイ、ガヤガヤわめいている。土産の相談、品定め、これからのスケジュールなどなど。そんな彼等が、集団から離れ、個となった瞬間、顔がこわばり、口を堅く閉ざしてしまふ。これは一体どういうことなんだろう。

外国人と出逢った場合、言語の障害があり、挨拶をかわすことは、確かにむずかしいことだが、同じ日本人同士が挨拶を交わすことが

できないというのは何としても理解に苦しむ。学校教育、家庭での躾けに原因があるのだろうか。

現実には空港への途中、ホテルから次のホテルへ向かい、かなりの時間待たされた。便乗して来た若い日本女性(三人組)が乗りこんで来ながら、朝の挨拶すらしないのに驚かされた。ましてや私を長時間待たせたことに對する詫びの言葉など聞ける筈もなかったし、又それを期待する方が無理だったかも知れない。

それに反し、プールサイドでのアメリカの少年、オーストラリア人が、スケッチしている私に気軽に声をかけ覗きこむ。私の片言英語でも、まあ何とかこちらの意志が半分ぐらい通じ、ほのぼのとした気分、筆を走らせることができた。ペンでのホテル前の朝市の人達の笑顔、片言の日本語で話しかけてくれたことも忘れることができない。

ホテルのルームメイド、食堂のウェーター、ドアマン

まん中が野田さんご夫妻



彼等も決して笑みを忘れない。彼等のは、ビジネス・スマイルだと言ってしまうとそれだけかも知れないが、肩を抱き合い写真をとる再会を約束するまでに親密になった。

気軽に挨拶できない、日本人全てが基本的な生活習慣が身につけていないとは言えないが、高度経済成長、社会の機構、教育のひずみといったものが原因なのかも知れない。年々海外渡航者が激増する昨今、国際的感覚を身につけて、誰にでも笑顔で接することのできる国民になってほしいものである。この旅行で改めて日本人の一面を客観的に見ることができたような気がする。

魔芯想

太田タマコ

ハタマコオリジナルフラワースタジオ主宰



真っ黒な空、今打ち上げられた花火のような、化物の花一輪、ゆらり、ゆらりと漂っている。見えない糸で操られた花のような物体ぐらり、と傾むいて、私を見降ろす。凄まじいノ、又、ぐらりノ花というより、巨大な花芯ノ感情をもった花芯ノ魂の芯、ゆらりと漂いながら、その芯はぎらぎらと燃えつづける。突然、色が飛ぶノ透明だノその長い長い茎をのばして、果てしない闇の中に、静かに、ゆっくり昇りはじめた。花卉のような透明の炎に、その身を委ねながら

あれは、確か夢の中での出会いでした。夢から覚めた一瞬、私は床の中で茫然と、あの夢の光景を想っていました。あの花芯は一体何？え、とあれは、沈黙の花の世界――

そう、あれはあの花ノ、いつか私が造った花、あのけしの花にちがいない。仕事場の天井に吊るされて、私の頭上にいつももあるけしの花、存在を忘れてしまった花、その日、私は早速その花を下に降りして手にしました。

丁度十年前になります。造花の可能性への挑戦として、花造りの女達が、芦屋ルナホールで、はな、おんな、けし――詩と造花の世界――花の言葉を岸田今日子さんの朗読で、その心の動きを、モダンダンスの人達にも、もの云わぬ花のために、たくさんの人達によって助けられ実現した、造花が主演する舞台創りをしました。

あらゆる女の感情、不安、誘惑、気まぐれ、ナルシズム、妖艶、純心無垢等、数々の女の内面をけしの花に投影させて、女の化身としてけしの花を造りました。あれからずっと私の頭上で、ほこりにまみれて吊された花は、あの時の一輪のけしの花でした。十年の年月の中で、あの頃は、あんなに美しかったのに、今は見る影もなく色褪せてしまった花、かすかにけし

の形をとどめた造花、みたくないものをみた哀しさ。だがその萎えた花びらの中心の奥の花芯ノ不思議なぐらいに妖しい。ベップで造ったおしべはどこどころぬけ落ちて、虫が食ったようなのに、その表情は、十年前より、もっと複雑に色づき、形を得て妖まめかしい、まるで、魔の精が宿ったのかと思えない表情をしていました。

六月二十日夜芦屋ルナホールで「マイム造花の世界」を、一回だけ公演いたします。あの夢から三年間、頭上のけしを視めつづけて、想いをめぐらして、「魔芯想」なる舞台を花造り達がやることになりました。私たちの造る花、自ら語ることも、動くことも出来ない花達のために、今再び、造花のもつ虚も実も、醜も美もさらけ出すことによって、造花がはじめて命を得、魂有るはなとして存在するのではないかと思えるのです。

マイム、花のマイム、花とヨネヤママコとの絡み、魔精としてのママコの感性のマイム、この舞台のためママコからイメージした情念の芯がどんなふうに妖気漂う舞台を繰り広げてくれるのか、今は、ただ、主演する花造り達が命をかけてはなをつくりつづける、そのみなのです。

★「魔芯想」マイム・造花の世界
6月20日(土) 6・30PM 芦屋ルナホール
出演/ヨネヤママコ・藤井博三 2000円

一冊の本との 確かな出会い



紀伊國屋書店

梅田店・大阪市北区芝田1-1-3
阪急三番街 ☎(372) 5821

グランドビル店・大阪市北区角田8-47
阪急グランドビル ☎(315) 8970

小樽／札幌／新潟／川越
東京／船橋／岡山／広島
松山／福岡／熊本
サンフランシスコ／ロサンゼルス

こうべにふれあいのディテールを

心の通う店創り



神戸日建

商業施設全般・調査企画・店舗装備・設計施工

株式会社 神戸日建

本社(設計室) 神戸市中央区御幸通3丁目2-20
PHONE (078) 252-1321(代)
神戸事業部 PHONE (078) 251-3525(代)
名古屋事業部 PHONE (052) 561-3618
東京事業部 PHONE (03) 278-1369
●ローン・リースの開店資金のご相談を承ります。

ある集い・その足あと

「真珠の街神戸」を考える プロジェクト会議

高橋 洋三（「真珠の街神戸」を考えるプロジェクト会議・高橋兄弟商会常務）

神戸は真珠の街です。

一般の人々は、真珠といえませんが、伊勢志摩を連想します。ところが、真珠の大部分は神戸の真珠業者によって扱われているのです。「真珠の街神戸」を考えるプロジェクト会議は、この事実を広く人々に知ってもらおう、世界に知られた神戸の真珠業者もファッション都市神戸をささえる一本の柱となるよう積極的に協力しよう、と業界若手を中心として結成されたグループです。

真珠は日本の特産物として、世界中に送り出されています。その八割が神戸から輸出されているのですから、文字通り神戸は世界の



シンボルマークは増田幸一氏（中央）によって決定

真珠の中心地です。その意味から

も、「真珠の街神戸」を考えるプロジェクト会議は、PEARL

CITY KOBE を掲げて活動

しているのです。美しい海のある

明い街神戸と、神秘的なやさし

さをたたえた真珠のイメージを結

び合わせることが大切です。その

ようなイメージをシンボルマーク

で表現したらどうだろうか、プロ

ジェクト会議が中心となってシン

ボルマークを作ることになりました

た。神戸という街は素晴らしい才

能を持った人が数多くいる所です

思わぬ所からも応募に参加する人

が現われたりして、メンバーは大

いに知恵を絞った訳ですが最終的

に神戸在住のデザイナー増田幸一

氏のマークがシンボルマークに選

ばれました。現在、パールシテイ

コウベのシンボルマークを利用し

た活動が展開されています。その

ひとつに、看板作戦があります。

現在、神戸で真珠に関わりを持

つ業者は、およそ二五〇。そのう

ちかなりの業者が山本通、北野町

に集中しています。異人館のある

まちと呼ばれている一帯が、神戸

の真珠業者の多い地域と一致しているのです。一度、山本通、北野町を歩きながら、ブティックやレストランのように派手さはないけれど、古い歴史を感じさせるようなあるいは小さくひかえめな看板などから、真珠業者の名前を探してみて下さい。これ程多くの真珠業者がこの街にいたのかと、改めて驚かれるに違いありません。

ファッション都市神戸 れは

日本国内だけを対象として宣言されているのでしょうか。我々真珠業者は明治の開港以来、日本の真珠を海の下に送り続けてきました。これまで、一般の人々になじ

みのなかった神戸の真珠も、今、神戸の地場産業として新しい段階に進もうとしているのです。これ

まで我々業界のつちかかってきた諸外国との関係が、ファッション都市神戸を世界に紹介する一つの手段とならないでしょうか。また、

ライフスタイルそのものを対象とする神戸ファッションの良さを、真珠で表現できないものでしょう

か。我々は、その目を常に前に向け、そして単に一つの業界にとら

われない幅広い活動を今後共、考えてゆきたいのです。

パールシテイ コウベ万歳。

「真珠の街神戸」を考えるプロジェクト会議／中央区山本通2丁目2-1302

号 078-242-0593

□連載エッセイ／私のひろいもの
 〈30〉

苦楽園とは

竹中 郁 〈詩人・絵も〉



国鉄の芦屋駅の前を走るバスで「苦楽園」行きというのがある。それに乗ると終点は小さい谷の橋のたもとで、その橋は「三笑橋」という名だ。

ここらは大正十年ごろに土地開発された。電鉄沿線に土地経営がはあったが、その波の一つだ。

となりの「甲陽園」や東隣りの「香櫨園」遠く京阪電鉄の「香里園」なども、みな兄弟なみの出生だったが、その命名ぶりを見くらべると、どうも「三笑」といい「苦楽」といい、ほかのが甘ければかりの客引き性なのに、この二つは渋い。

「三笑」という中国の故事は、詩人陶淵明を送ってでた法師がつい話に夢中になって、渡るつもりになかった虎溪という谷をうっかり渡った。そこで三人が大笑いをしたのに由来する。絵にも描かれること多く、大観や関雪も手がけた。その虎溪三笑からこの橋名はもらったのだ。

その苦楽園の売出し広告文に、スイスのローザンヌに似ているとかと、与謝野晶子夫妻が云っていたのもおぼえている。

とにかく今日走っても、あの東六甲山の斜面は

いい眺めで、ひろびろと心地よい。後に六麓荘という一廓がくつついた形でできて、ゆったりとした住宅地の佳景をつくった。苦楽園がはじめラジューム温泉などといって浴場を建てたあたりは（これは三笑橋から東へ少々のところ）様変わりして大正時代の俤がない。

とにかく一回だけこの温泉の湯につかった記憶がある。大きな浴槽をたった一人で占めて泳いだ記憶がある。

「苦楽」といい三笑といい、一たい誰が命名したのですか」とわが近隣の中村孝子さんがその土地会社を経営した人の娘さんときいて尋ねた。「あすこには下村海南が住んでましたね、海南が命名したのでしょうか」。この質問には立ちどころに夫人は「いいえ、大隈重信が開業式に立寄って、そのとき附けたとか書いています」

大隈重信は早大の創立者、総理大臣も務めて、当時は侯爵だった。まあ明治大正にわたっての政界の人物。しかし、そんなに漢学素養があったとも思えないのに、ちょっとふしぎな気もする。

この土地の開拓者中村伊三郎は阪急の小林一三と義兄弟の誓いをした仲で、似たようなタイプの事業家だったらしい。中村夫人の努力で、じつはこの命名者は大隈ではなくて、時の宮内大臣の土方久元だと訂正の報告があった。この土方の孫が土方与志といって、新劇運動のメッカの築地小劇場の創立者。欧州やロシヤの新劇の演出を自らも学んできた人だった。

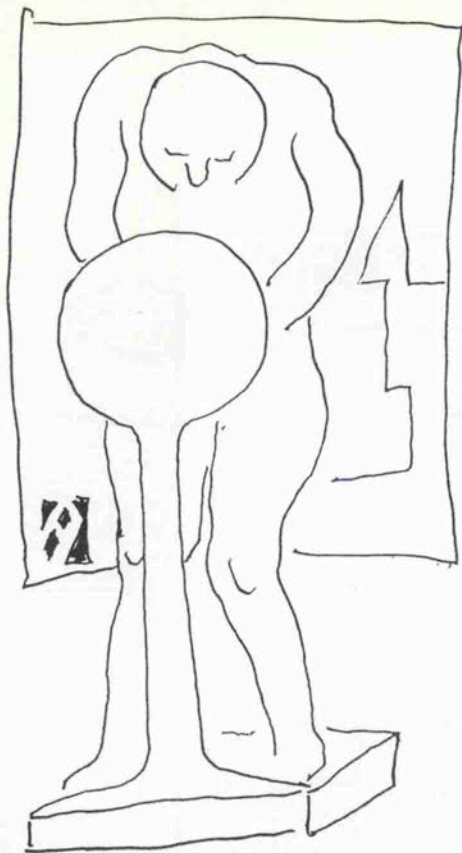
私が一度だけ入浴したラジウム温泉は、三笑橋の東方向の川下に当るのだが、今日さぐりに行ってみても手掛りになるものはない。

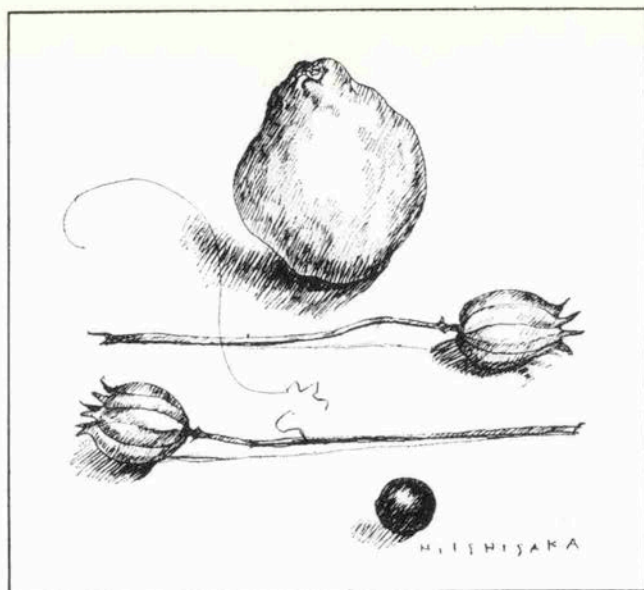
六甲山塊の風景は人家が殖えこそすれ、その骨格は数十年前と変りはない。甲陽園に映画撮影所があったり、苦楽園に温泉があったり、そんな人為の末端だけが甚しく変る。その温泉の脱衣場で、

はじめて、自動秤の目盛りを読んで、便利なのができたなあと感じたのを覚えている。それまでの旧式では、いちいち鉄の分銅を受け皿へせてみて、自分で秤るか、誰かに秤ってもらわなければならないかった。何貫何十匁あったか、それはもう忘れてしまったが、脱衣場の外庭に小さい噴水がちよるちよると吹き上っていたのを覚えてる。

自動秤の方は大そうな便利で印象的だったのに案外うすれてしまった。外の噴水のみっともないのが印象にのこったのだ。妙なことになるものだ。ついでに記しておくが関東大震災で東京の出版力が低下したとき、大阪でプラトン社というのが「苦楽」という娯楽文芸誌を売出した。立派な本だった。但し苦楽園とは係りなしだったと思う。

今の甲南大学の背後の山に、大谷光瑞がインドみやげのスタイルで堂々たる山荘をもっていた。「二楽荘」と云った。これを西の方にかかえていたことも「苦楽園」という名が生れた理由の一つだろう。





連載エッセイ

折々の神戸〔Ⅲ〕

あじさいの

咲く町

多田 智満子 詩人

絵 / 石阪 春生

港町の初夏の風すべての物象から、すこしずつ、重さとけだるさとを吹きとばす。

山のみどりの斜面をざわざわと吹きおろし、町の通りをジグザグと遊びながら吹きぬけて、波止場へ、海へ、そして沖へと去ってゆく風。

この季節、しかしもうひとむかしも前に、わたしはこんなふうになつたものだ。

光る鳩

キリキリ舞いするキリスト

白い波止場に市が立つ

夢が泡立つ

風が立つ

「夏のはじめの唄」と題する詩の一節である。そう、この季節、街を行く女のかかどがかるやかになる。男のうなじがみずみずしくなる。老人の白髪さえも新鮮な風に光る。

そして「白い波止場に市が立つ」ポर्टピア、ポर्टピアと、街に歌が流れ、電車もタクシード、みなあの青いポर्टピアのシンボルマークを貼りつけて、なぜかうきうきした表情だ。

ショーウィンドウのTシャツや百円ライターにまで、あのマークがうれしそうについていて、それをつまみあげてうれしそうに買っていくのを見て、それをまたにやにやと見ているのがいたりする。

いつもは西日本の、ちょっとおしゃれな一地方都市にすぎないけれど、この博覧会の会期中は、日本中の（オーバーに言うところ世界の）視線をあつめる祭の場です。さあいらっしやい、見てください。——こんなふうな子供らしい晴れがましきで、町中がそわそわしている。

といっても、本当にそわそわしているのはポータピアの関係者と、地元のマスコミと、おしよせる見物客たちが落していく金に関心のある商店街や交通機関ぐらゐなもので、大多数の市民は、ああ、なんだかやってますな、という表情。例によってインテリほどしらけている傾向がある。

多少興味はあっても、神戸に住んでいるとあまり身近すぎ、いつでも行けるという安心感で、そのうちに、とか、すいているとき、とか思っている間に、とうとう会期が終ってしまう、というううな人も多いのではなからうか。

かく言うわたしもまだ一度ものぞいていない。会期前に一度、プレビューとやらでテーマ館だけは見せていただいたが、そのうち、東京の親類や友人が来たら案内することになるだろうと思っている。

とかくするうちに梅雨にさしかかり、あじさいの咲く頃になると、初夏の軽快さが少ししめり気を帯びて、街がはずまなくなる。しかし六甲山系の風化した花崗岩が砂になり土となったこの町は、もともと土質が白っぽいので、黒土や赤土のもつ粘着性のうっとうしさが無い。

あじさいは神戸を代表する花で、六甲山にはこれにみごとなあじさいの群落がある。山のこととて花期はひと月おくれるけれども。

わたしの家の庭も土質が合うとみえて、さし木にしておけばいくらでもふえる。場所が限られるからふやさないだけである。

花は緑がかった淡黄色から、やがてうっすらと青味を帯び、半月がかりで全体があわあわした青紫に染めあげられる。それから盛りを過ぎると紫が赤味を増し、顔唐期の色調となる。楠玉のような形をして、大きいのは子供の頭ほどもあるけれども、たくさんの小さな花の集まりだから、巨大でも繊細で、もうい柔らかな美しさがある。

しとしと降る雨に濡れて、重たげに露をふくんで咲いているところ、なんともいぬ風情がある。

ことにたそがれどきなど、内部からの蒼白い光に照らされている感じで、わたしはいつも人魂を連想してしまう。生者の世界に心ひかれて、地上をさまよっている人魂……

それというのも、わたしの母が亡くなったのはあじさいの咲く季節であった。

東京住まいの老母は、年に一度、神戸へきてわたしの家に滞在するのをたのしみにしていた。

健在ならばきっと今頃は神戸にきていて、わたしは、ちょっとめんどうだな、と思ひながら母をポータピアへ連れていつているだろう。母はテーマ館に出ている娘の詩を、なんだかよくわからないけれどもよろこんでながめるだろう。

その母はもういない。老人が消えうせ、若者が中年になり、また新しい若者たちが潤歩する街を、ポータピア、ポータピアのしらべが流れ、あじさいの蕾がまたみずみずしくふくらんで行く。

'81 Fresh Summer



〈本店〉ベル・ジュパンスの専門店
神戸・三宮神社北東三上ビル2F TEL.331-8894・4917

〈芦屋支店〉
芦屋・阪神芦屋駅山側 TEL.0797-22-4067

お貸衣裳部
花嫁衣裳サロン 東京初代遠藤波津子直流
本店美容室エリザベス 畑尾美久子の店
本店美容室エリザベスの上 TEL 331-3258
専属結婚式場 生田神社会館/プラン・ドゥ・プラン/阪急甲ホテル/蘇州園他

株式会社 美容室

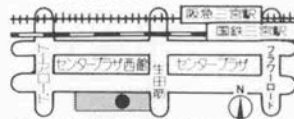
エリザベス

ファッションに
“贅”を尽くすのは素敵。
でも、
いつも美しく着ている
人はもっと素敵。



技術に贅を尽くしファッションを
常に美しく——ニシジマ

●型くずれの防止 ●素材感の回復 ●カルテの作成
●お客さまのお好みに合せた仕上 ●ファッショングリーニングの最新情報の提供



神戸市中央区三宮町2丁目10番7号
グレイス神戸B1 ☎ (078) 332-2440

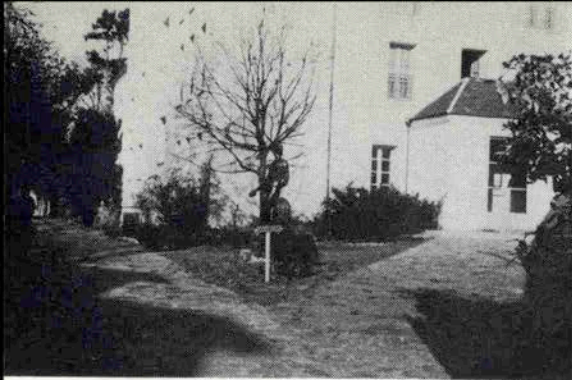
△その22▽

サンジェルマン・アン・レイ モーリス・ドニ美術館

池上 忠治△神戸大学助教授▽

パリの西郊にあるサン・ジェルマン・アン・レイは、人口四万たらずの小さな町でしかない。だが第二帝政から第三共和制にかけてこの小さな町が栄華の時期を迎えたことは、町の中心をなす城館の歴史をひもとけば簡単にわかることである。このシャトーは今日フランス考古博物館となっていて、古代ガリアの多くの発掘品が並べられている。

昨年の秋、シャトーから歩いて十分ほどのところにモーリス・ドニ美術館が公開された。ドニとド



モーリス・ドニ美術館正面入口

ビュッシーとはこの町と浅からぬ

因縁のある芸術家で、二人をまとめて一つの美術館にする予定だということを私は以前から聞いていた。結局は別々の施設ができたわけでもなくフランスの近代芸術に親しむ者にとって有難い場所だ

ドニはナビ派の画家のひとりである。この町の小修道院を住居として三十年に及ぶ後半生を送った。言うまでもなくナビ派はゴーガンの強い影響のもとに世紀末のパリに結成された画家グループで、ボナールやヴエイヤール、マイヨールなどもその一員だった。彼らの画業が「アール・ヌヴォ」にも深くかわかることは、この正月に兵庫県立近代美術館で開かれた「ジャボニスムとアール・ヌヴォ展」によっても良く知られる。

たまたま私は昨年十一月に十数年ぶりでサン・ジェルマン・アン・レイを再訪し、初めてドニ美術館を見た。屋根裏も含めて三階建ての小修道院は立派な美術館となっており、ドニの油絵やステンドグラス、ポスターや版画などはもとより、他の画家たちの作品も多

く並べられている。ゴーガン、ベ

ルナール、ボナール等々である。

屋根裏にドニの多くの版画が並ん

でおり、それらを印刷したプレス

機や書斎机まで置いてあるのは、

いかにも個人美術館ならではのこ

とで、画家の生前をしのぶのに何

よりのよすがとなる。つまり、こ

の美術館はドニのみならずナビ派

やアール・ヌヴォにも密接な関係

のある設立物で、パリ市内にもこ

うした場所がないだけに、より一

層に貴重な存在として感じられる

ドニ美術館の裏庭からは、はる

かにセーヌ河が見える。サン・ジ

エルマン・アン・レイのシャトー

のテラスから見れば、セーヌはす

ぐ眼下に見える。遠くにはパリ西

北部が望まれ、近ごろ高層建築が

次々と立つのが目ざわりでなくも

ない。だが、この町の良さはシャ

トーや美術館にも確かにありはす

るが、実はレストランにもある。

シャトーへの入口の真前にあって

入口の目立たない「ウエルズ公

(フランス・ド・ギャル)」、ここ

は定食が実においしくて、わずか

千五百円だった。店のムードも良

く、サーヴィスもゆきとどいてい

た。もっとも、私がこの店に好感

をもったのは昨年のボジョレの新

酒が本当にうまくて安かったせい

なのかもしれない。

KOBE, THE CAPITAL OF PEARLS

パール特集〈1〉座談会

フレッシュな感覚で 真珠業界に新風を

□出席者□

田崎

俊作

〔田崎真珠株式会社社長
日本真珠振興会広報委員長〕

森

隆

〔森真珠株式会社社長〕

中村

友一

〔有限会社御影貿易商事社長
日本真珠振興会広報副委員長〕

木下

章夫

〔株式会社木下真珠社長〕

高橋

洋三

〔台名会社高橋兄弟商会常務
真珠の街・神戸を考えるプロジェクト会議代表〕

近澤

真

〔近澤真珠株式会社取締役〕

神戸の真珠は意外に知られていない

今年には神戸で、いろいろ催しが開かれる訳ですが、まず神戸と真珠の結びつきと、業界の現況ということからお話し願います。

田崎 神戸は、真珠業界にとって、立地条件としては一番取り引きにふさわしい場所であったのは事実です。ところが、戦後の非常な好景気のため、他産業との競争というか、ふれあいが少なく、真珠業界だけ孤立して独占的になってしまいうような体質が生まれてきていたような気がします。従って、神戸の真珠業界ということを中心考えず、ただ業界のための真珠屋というだけの視点にとどまる風潮があったんですね。

その後、昭和40年代の不況を経験し、今のようには価値観が多様化し、商品が氾濫してきた結果、他の商品との競合とか、宣伝の時代というのを新たに認識しなければ、真珠業自体がやっていけないという意見が、期せずして「真珠の街・神戸」を考えるプロジェクトチームと

いう若手から盛りあがってきたし、業界全体にも生まれつつある訳ですよ。ポトピアが開かれる絶好の機会に、集中的にパールシティ神戸のキャンペーンを行おう。また、新しい世代にどう業界の方向づけをすべきかというのを軸にいろいろな企画を行い、神戸にムードを盛りあげていこうというねらいが高まってきました。

森 真珠が他の業界に比べて閉鎖的であったのは、神戸で全国の真珠のほとんどが製品化されていることがあまり知られていない大きな原因ですね。戦後から、この間まで、できた製品の90%以上が外国に売られ、国内で売る努力をしなくても、充分やっていったんです。高度成長期に入ってから、いつの間にか真珠も輸出が半分、国内が半分と大きく発展してきて、価値あるものとして見直されてきた訳です。その時期にちょうど神戸でポトピアが開かれ、神戸のファッション業界が大きく前面に出てきて、その中に真珠も入っていると、この機会に再認識して、神戸の地場産業としてより安定的に発展できる業界に成長していきたいと考えています。

中村 地場産業であるといっても、一般にはそういう認識はまだ薄いですね。輸出に便利な港があり、真珠の養殖が盛んな伊勢、四国、九州の三角地帯の中にあり現在は、日本の真珠の80%が神戸で加工されています。従って、神戸と真珠は切り離せない。それが一般に知られていないのは業界のPR不足もあったのですが、今、若手のプロジェクトチームによってキャンペーンが進められており、折りしも全国の眼が神戸に集まっている時です。この場を通じてPRを強めていきたいですね。

木下 戦前は市場として確定されたものがない時代で、市場視野が広まってきたのはここ25年ぐらいですね。その間の歴史の変遷につれて、業界内の人間も変わってきています。今度のファッションライブラリアターの出展だとか、ポートピア'81での催しとかいう行事が、一つの出発点です。ポートピア'81に集まる方々に本当に真珠の街だという認識を新たにしたいというねらいです。戦前の真珠に対する考え方はあくまでも宝石という価値で、ファッションと結びつけたのは最近だと思えますね。ここきて、みんなに抵抗なく受け入れられるようになって、いろいろな企画に若い人が参加して、積極的

に提案し行動してくれているというのが現状ですね。

若い力が業界の新しい推進力に
——「真珠の街・神戸」を考えるプロジェクトチームの動きが活発なようですが、そのいきさつとか内容はどういったことなのでしょうか。

高橋 話の初めは去年の春頃ですが、それまでも萌芽的な状態としてはあったと思うんです。神戸で真珠の仕事をしている若い人の間で、我々はその中にいるので当り前に思っているけど、一般の人は神戸の真珠をあまり知らないということが話題になったんです。真珠は世界的にポピュラーなものとして広まっています。現状では真珠そのもののプロモーションは真珠組合などがやっていますが、真珠に携わる者すべてが参加してのPR活動にはなっていない。真珠を他のダイヤや金銀製品と一緒に取り扱うのではなく、真珠そのもののPRをやりたい、それが最終的に真珠の値うちをより高めていくことにつながるんじゃないか、それには商売の第一線にいる輸出業者や小売業者といった末端の人たちだけに任せきりにするのでなく、海の生産から始まり、世界の人々の手に渡



田嶋 俊作さん



森 隆さん



中村 友一さん

るまでの過程すべてを含めて真珠に携わる人はPRに参加すべきだというのが我々の主張なんです。

何故「パールシティ神戸」という看板を掲げたかという、神戸でなら、町ぐるみ、地場産業としてPRすることができんじゃないかという判断からなんです。それと神戸はファッション都市として売り出そうとしている、それと真珠は決して無縁ではない、ファッション都市神戸を支える一つの柱に真珠はなれるんじゃないかということがもう一つの理由です。

そして「パールシティ神戸」を広めていく方法として具体的な提案をしてきたのですが、例えば、シンボルマークを作りたい、そのマークをいろんな形で展開したい、ポर्टピア81に催しをやりたい、従来、東京で行われていたデザインコンテストを神戸でやりたい、美人コンテストみたいなものをしたいなどがありました。パールシティ神戸を表に掲げた業界のためのPR活動を実現するための方法を我々が提案し、できるものは取り上げていただくという風な活動の方向で進んできた訳です。

近澤 意外に反響が早かったんですね。実際に一年足らずで「パールシティ神戸」という言葉が業界内に浸透してきたということは、神戸で真珠を扱う人がどこか潜在的にそういう気持を持っていたんじゃないかと思うんです。プロジェクト会議のメンバーは、平均30才ぐらいでどちらかという建て前論ばかり言えるような気楽な立場の者が多くて、こうなればいいとかこうすべきだという議論からスタートした訳ですが、実際にそれを主張して認められると、それを実現していかねばならない。それには全員が共同作業を行うことでムードを盛りあげていかなければならない。そんなことで、皆が割と積極的に参加し、高橋さんのもとに結束したという感じでいろんなことをやってこれたのです。

田崎 業界に浸透するのが早かったというのは、丁度振興会自体にもそういう宣伝活動をもっと活発にすべきだという気運がここ一年ほど非常に高まってきていたから

ですね。だから、まさに渡りに船ということで、どんどん吸収され、実現の運びとなったんですね。

長年、真珠を扱っていると、利益、損得というものがどうしても先に頭にあつて純粋に業界を見つめることが疎くなつてきていたと思うんです。それで、二代目的な若いフレッシュな感覚を持った人が、こういう運動を起こしたということは、業界において大変意義のあることだと受けとめています。

中村 思い起こすと、今より10年程前に当時30代だった我々が集まり、新しいエネルギーを業界に吹き込もうと神戸真珠親睦会を作った訳です。日本真珠振興会に加入するには制約もあり、若い人は業界の主流になかなか入れない。そこで親睦会を作り、一緒に勉強しようと呼びかけた訳です。これは10年かかってそれなりの成果を収めてきたと思いますが、10年を周期にさらに若い人が脱皮を図っているという感じがします。若い人たちの活力、既成の団体では持てない勇氣とバイタリティ、新しいインテリジェンスに期待しています。

木下 振興会というのは業界のリーダーシップで、そういう方たちの声と若い連中の考えがタイミングよく合ったんですね。そして現在は、真珠を何なく受け入れられるファッションに変わってきて、一般の消費者の方にも盛りあがりを感じられるような時期になってきているんじゃないですかね。若い人の場合、抵抗なくファッションと真珠が結びつけられ、ファッション―神戸とか神戸―真珠というようにスツツと文字と文字が図式化されてしまふんですよ。

真珠のPR活動をもっと積極的に

――PR活動を大に行っているという皆さんの意見ですが、やはり今までは真珠業界としてはPR不足だったんじゃないか。

森 真珠の宣伝というのは、他業種から見るとはるかに少なくて、皆やらないかといって、何とか輸出を中

心に売り上げが確保できるものだから、それほど必要性に迫られてなかったと思いますね。けれどもこの10年間、需要も高くなり、それぞれに宣伝をやらなくては行かんという気持は潜在意識には充分持っていたと思いますよ。

木下 もう一つは、養殖から加工という真珠の流れが業界内で整備されてきて、かなり安定してきているという結果を生み出す要素になっていますね。業界がグレードアップしたんですね。

田崎 ファッションを支えるものの一つに真珠がなることには間違いがないと思います。ただ、今まで業界の訴え方が足りなかったんですね。神戸市にしても、地場産業という時、真珠はやっとなるか出ないかというのが現状です。本当は神戸市自体でも真珠をもっといろんな面で打ち出した方が、神戸の特性を世界的に価値あるものと認められると思うんです。神戸の特性は何かということやはり港町ということ、真珠が強力な構成になりうるでしょう。我々の努力が足りなかったという点が多分にあります。

北京の故宮博物館を見ると、馬の鞍とか帽子とかに真

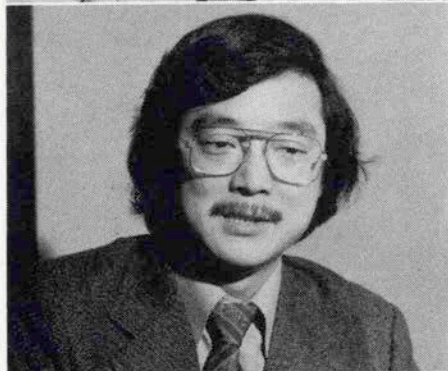
珠をたくさん使っているんです。真珠をただネックレスや指輪に使うしか考えなかったり、輸出だけを主体にしてこれが真珠屋の在り方と決めていた我々の考え方を改善する必要があるにありません。トータルでどんなサービスをすればいいか、どんな使い方をしたら楽しめるか、

いかに真珠を商品として一般の人に認識させていくか、いろいろな意味でぶつけていかなければ売れない訳ですよ。ただ店に並べているだけでは流通部門として時代遅れです。日本の車が、アメリカやドイツを抜いたのはニーズにいかにかうまく応えたかという点にある訳で、我々も消費者の好みに合わせてどうすればいいか考え、それが利益につながるんだという発想で、これから業界も盛りあがっていかなくては、本当の流通部門のリーダーシップはとれないと思いますね。その土壌というか、背景になるには神戸はうってつけだと思うんです。

高橋 つい先日、神戸真珠親睦会の集まりに、メンバーの一人が、ドイツ人のバイヤーを連れてきたんです。我々はちよつとしたコーナーを設けて、パールシティ神戸のシールやステッカー、傘、Tシャツなどのサンプルを置いていたんです。するとそのお客さんが、「神戸は真



木下 章夫さん



高橋 洋三さん



近澤 真さん

からね。

多彩な催しから新しい方向づけをしたい

——若い方々の運動で盛りあがってきているこの時期に、いろいろ催しがあるわけですね。その内容などをお話してください。

田崎 パールフェスティバルには多彩な行事を織り込んでいるんですよ。一日たっぷり真珠業界に関連した人たちで使ってもらうわけです。

木下 パールフェスティバルは7月12日(月)に博覧会場内国際広場で行われます。朝10時に始まり、分刻みで夜8時30分までリハ・サルと本番を兼ね合いながら行くんです。皆、揃いのパールマークを染めぬいたTシャツを着て、ロックでも踊ろうかということなんです。(笑)

近澤 メインは、フアツションショーとしばたはつみシヨと6月に決定したパールプリンセスの紹介とディスコタイムという組み合わせを昼と夕の2回やることです。後、午前中に木馬座のぬいぐるみショーがあります。森 子供から大人まで楽しんでいただくという趣向です。もう一つ取り上げてほしいのはパールデザインコンテストですね。

木下 これは毎年やっていて、世界的な行事になり、海外からも応募が来いています。東京でやっていたのを神戸に持ってきた訳です。6月15日に発表会と授賞式が神戸ポートピアホテルで開かれます。この時に、6月12日、神戸文化ホールで選出されたパールプリンセスも発表することになってますね。

高橋 プリンセスの応募基準が面白いんじゃないですか。木下 18才以上の女性で未婚、既婚、国籍は問いません。上限はなし。(笑) 真珠の似合う人が対象なんです。真珠は若い人が似合うとは限らないですからね。選ばれたパールプリンセスの方には真珠を通じた国際親善、さまざまな真珠PRキャンペーンの場に活躍していただきます。デザインコンテストの入賞作品は7月から9月まで

珠の街だと、それはもう世界中の宝石屋が皆知っている。むしろ、世界に向かってやった方がいい。私はドイツでやりたいから、シールをくれ」とシールをたくさん買って帰られたんですが、日本の方よりも海外の方の方が、もちろん業者の方だから当然といえば当然ですが、「パールシティ神戸」ということを抵抗なく受け入れて、どんどんやってほしいといわれる訳です。僕自身としては、パールシティ神戸よりむしろパールカントリージヤパンの方が外国に対してはいんじやないかという気はするんですが。当初業界内でもパールシティ神戸という、一部に抵抗があるんじゃないかと思ったのは全く見当違いの危惧であったことを、外人の方から逆に教えられたような形でしたね。今後は、国内だけでなく海外にそういった意味合いのことをやっていくのが課題になってくると思います。

近澤 こういう運動は1年や2年でどうこうするものじゃないし、とにかく地元から固めていって、将来を考えて地道にやっていこうじゃないかということですよ。

高橋 現在、我々が進めている運動の一つに看板作戦というのがあるんですが、それは、パールシティ神戸という名目でシンボルマークを作り、それを個々の会社のマークとは別に掲げていただきたいとお願ひしてまわっている訳です。我々の営業所があるのは、多くが山本通、北野町地区、異人館街と一致する部分が多いんですね。幸い観光客の方もずいぶん増えてきたので、統一のシンボルマークを配すれば、よけい目立つだろうし、全国向けのPRになるんじゃないかという発想です。

また、200以上ある神戸の業者の皆さんに「パールシティ神戸」の宣伝をいわゆる業界広告として新聞に出したいと声をかけたところ、現在100社ぐらいが賛同してくれています。その中で改めて神戸の真珠業者の多さを知らされ、もっと頑張らねばと感じました。組織だった動きは我々が中心になってやらないと神戸の場合むずかしいです。振興会や輸出組合になると神戸だけじゃないです

ファッショナライブシアターに展示します。

中村 これらの催しが単なるお祭り騒ぎに終わらずに、何か新しい方向づけが生まれるようにしたいですね。真珠の美しさを多くの人の心に植えつけ「毎日の生活の中で生きている真珠」を提案していきたいですね。デザインコンテストでも、従来の「フォーマルな装いに似合う真珠」だけでなく、今年初めて「カジュアルウェアに生かせる真珠」ということに挑戦しています。色と形の多様性を十分駆使したデザインが要求されてくるわけです。

最近の活発な動きを将来につなげていこう

——パールシティ神戸の運動と神戸での集中的な催しを引き継いでの今後の方針ということで締めくくりをお願いします。

近澤 今から行われる大きなイベントには、積極的に参加、協力していきますが、それだけに目をとらわれず、もっと幅広い地道なPR活動を行っていききたいと思っています。今後の提案として、神戸だけじゃなくいろんな地区の若い人たちとつながりをもち、我々と同じような動きを各地域でもらいたいということで、若手による真珠会議を開きたいという考えもあります。

高橋 来年以降のプロジェクト会議の方向性となると、振興会でもやっていますが、いわゆる長期的なビジョンを業界全体のコンセンサスとして持つ必要があるという考えです。単に業界側からの意見だけでなく、一般の人々がどういうイメージを持っているか、またどういったものを求めているかということ、我々の今後の提案の主要な内容の中に含めていくべきだと考えています。

木下 今回の活動は、親睦会、振興会広報委員会のつながりで、企画、実行していますが、実際に動かししているのは神戸の人がほとんどです。業界全体として継続的に大きな動きができるように、我々も一生懸命フォローアップしようという気があります。具体的なことは若い連中から提案してもらい、我々が実行していくということに

なると思いますので、いろいろ協力お願いします。

中村 将来の真珠業界のあり方として、私は宝石と人との出合いの原点は何であつたらうと考えますね。財産であり、マネービルの手段でありということではなく、美しいもののへの素直な感動が原点でした。そこへ一度戻ってみる必要がありますね。ポर्टピアでもファッションのルーツから未来への手がかかりをつかむという発想が出されていますが、今後の業界は真珠のロマン、神秘性を生かしながら、その美しさを多くの人にわかってもらうことが重要です。これが真珠人が社会に対してもつ使命でもあり、我々の商売は人間の夢を売り、永遠の美を訴えていくという崇高な使命をもっているわけです。一種のプライドを持ってやっていくべきだと思います。

森 振り返ってみて、真珠が日本の代表的産物の一つであるということ、そしてみんなに夢を与える商品としてのイメージは、昔から評価されていたことなんですね。そういうことが、今回のようないろいろな行事をますます続けていけるようなきっかけとなって、将来につなげていくことに期待していきます。

田崎 私も今後ともずっと続くようにしたいと思っていますね。だいたいいろいろ企画は出るんですが、経費の問題でいつも止まるのが、過去非常に多いわけですよ。だから、業界の空気とか認識を新たにしたいですね。そして、業界全体でやろうじゃないかということで、資金の調達も十分でき、やる方もやりがいがあるというムードに今後もどんどん進めていただきたいと思います。まだ、いろいろな問題も整理中ですが、今後、真珠会館をどう使うかを考えていかなければならないと考えています。先ほど真珠会議の話なども出ましたが、新しい気運を作って、他の業界にも呼びかけていきたいです。振興会としても、それなりのバックアップはしますけれどもね。まあ、こういったことを契機にして、業界が景気づいていくことに期待したいですね。

(花銀別館にて)